

一八八五年十月二十三日(金)

シャームプクルの家でサルカル医師、ナレンドラ、シャシー、シャラト、校長、ギリシユたちと共に

以前の話——神狂状態のとき——クティの後ろを通つた時に体が護摩ホーマの火のように燃え上がったこと——パドマローチャンの信念と彼の死

タクール、聖ラーマクリシユナは、シャームプクルの家に病氣治療のために来ておられて、信者たちにとりまかれて坐つていらつしやる。今日は満月ゴジャガリ・フルニマ(歌註)の日。一八八五年十月二十三日、金曜日。時間は十時ころ。タクールは校長を相手に話をしていらつしやる。

校長がタクールの足にソックスを履はかせている。

聖ラーマクリシユナ「(ニコニコしながら)——毛のスカーフを切つて足に履はいてはダメかね？ きつとあつたかくて具合がいいと思うよ」(校長笑う)

昨日きのう、木曜日の夜、タクールはサルカル医師といろいろ話をなされた。そのことを話題にして、タクールは面白そうに笑いながら校長におつしやるのである。

「昨日きのうはどれだけ、トウフ、トウフ(あなた、あなた)と言つたことか！」

タクールは昨日、こういう話もなされた——「人間には三つの苦惱(訳註2)があるのに、それでも、『お陰さまでうまくいっております』などと言っている。曲がったトゲで手を傷つけ、血がドクドク出ているのに——『いえ、私の手はなんでもありません』などと言う。智慧の火でそのトゲを焼き切らなければならぬのに——」

若いナレンがこの話を思い出してこう言った——「昨日おっしゃった曲がったトゲの話、とてもいいと思いました！ 智慧の火で焼き切れという……」

聖ラーマクリシュナ「わたしは、それとそっくりの状態になったことがあるんだよ。

クティの後ろの方を通っていた時、体が護摩ホマの火のように燃え上がった！

パドマローチャンが、『あなたの経験を、集会で皆にお伝えしますよ！』と言ったが、その後まもなく死んでしまつてね——」

十一時ころ、モニはタクールの病状を報告するためにサルカル医師の家に行った。

医師はタクールの病状を聞きながらも昨夜の話について非常な関心を示し、モニに何かと話をした。

(訳註1) コジャガリー・プールニマ——ドゥルガー祭(ヴィジャヤ・タシャミー)が終わってから最初の満月を指す。コジャガリーは、起きているのは誰か、という意味合いで、新月から始まったヴィジャヤ・タシャミーが終わって最初の満月の夜に、瞑想するなどして神の恵みを受けるのはとても恩寵があるとされている。プールニマは満月のこと。

(訳註2) 三つの苦惱——自然現象から受ける苦惱、他人や動物から受ける苦惱、精神的な要因から生ずる苦惱。

医師「私は昨日、さんざつトゥフ、トゥフ(あなた、あなた)と鳴かされましたよ。あんな上手な糸梳き職人にかかっちゃねえ! ハツハツハツ……」

モニ「その通り。ああいうグルの手に落ちなければ、我執はなくなりません」

昨日は信仰の話もずい分なさいましたよ! ——信仰は女の人みたいに、奥の部屋まで行ける」

医師「それも実に適切な表現だ。しかし、やはり智識を無視するわけにはいきませんからねえ」

モニ「大覚者様バネンサデワはそうはおっしゃいませんよ。あの方は智識ジュニヤナと信仰バクテイと、二つとも重視していらっしやるのです——つまり、無形の神と有形の神を。あの方はこうおっしゃるのですよ——信仰の力で、

無限水がところどころ氷になる。また智識の太陽が昇れば氷は溶けて元の水なる、と。つまり、信仰のヨーガで有形の神を、智識のヨーガで無形の神を、というわけです。

それから、ご覧になったと思いますが、あの方は神の身近にいらっしやうって、直接お会いになり、いつも話しておられるのです。幼い男の子のように、『マー、とても痛いんだよ!』などと訴えていらっしやるのですよ。

それから、オブザベーション(観察)のすごいこと! 博物館で動物の化石をご覧になったとき、すぐそれを聖者との交わりの重要性に振りかえてしまわれた! 石のそばにずーつとあったから、石になったんだよ。だから、聖者のそばから離れないようにしていれば、いやでも聖者になる」と

医師「イシヤンさんは昨日、アヴァターラ、アヴァターラとばかりおっしゃってでしたね。アヴァターラなんて! 人間を神と呼ぶなんて!」

モニ「あの方々が信じていらっしやることに、インターフィア(干渉)する必要はないでしょう?」

医師「ええ、まあそうですね」

モニ「それから、あの話には笑ってしまいましたねえ! ——ある人が家の焼けるのを見てきたが、それが新聞に出ていないので、友だちがどうしても信じなかった……」

医師は沈黙していた。——多分、タクールが、『あなたのサイエンスの本にはアヴァターラのこと
が載っていないから、アヴァターラはないと言うんだろう!』とおっしゃったのを思い出しているの
だろう。

十二時になった。サルカル医師はモニをうながして馬車に乗った。他の患者を往診したあと、最後
に聖ラーマクリシュナのところへ行くつもりなのだ。医師は先日、ギリシユの招待で、ブツダの生涯
の芝居を見物したが、馬車のなかでモニにこう話した。——「ブツダを慈悲の権化と言えはいいのに、
なぜヴィシユヌの化身と言うのだろう?」

医師はモニをヘデユアの四つ辻で降ろしてくれるらしい。

タクールの大覚の境地パラハンサ——一面に喜びの霽モヤ——至誠大実母バガヴァテイーがお姿を見せて言う

ゞさあ見て、手品だよ!ゞ

三時。タクールのそばに一、二の信者が坐っている。タクールは、「医者はいつ来る?」とか、「いま何時だい?」とか、何度も、何度も、子供のように我慢性なく、そばの者に聞いていらっしやる。

医師は今日、夕方来る予定になっているのだ。

突然、タクルは子供に変化したようになられた。枕をひざの上に抱きかかえて、ママゴト遊びの母親のように、枕を愛撫しながら乳を飲ませる仕草をなさっているようだ！ 恍惚として無邪気な笑いをたたえ——奇妙な具合に下衣をまとっていらっしやる！

モニはじめ信者たちはびっくりして、ただ、ただ、その様子に目を奪われていた。

間もなく平常に戻られた。食事の時間が来たので、タクルはシュジのパスを少し召し上がった。

(訳註、シュジのパス——小麦の粗粉に牛乳と砂糖を入れて粥にしたもの)

それからモニひとり手を相手に、秘密の話をして下さった。

聖ラーマクリシュナ「(モニひとりに)——つい今、前三昧のなかで何を見たと思う？ シオルに行く道に三、四クロシユ(10〜13km四方)も草原が広がっているとあるところがある。その草っ原に、わたしは独りでいたんだよ！ そこで一人の十五、六才くらいのバラマハンサを見た。ほら、前に五聖樹の杜で見たのとそっくりな人をね！

あたり一面、喜びが霧のように立ちこめていた！ その中から十三、四の少年が浮かび出てきて顔がはつきり見えた！ プールナの顔だった。二人とも真っ裸なのさ！——それから二人は草原を楽しそうに駆け回ったり、ふざけて遊んだりしたよ！

走ったあとでプールナは喉が渴いた。そしてコップで水を飲んだ。残りをわたしに持ってきた。わたしは、『バーイ(兄弟)、お前の残りなぞ、飲まないよ』と言うと、彼は笑いながら行って、コップを洗っ

て新しい水をくんで持ってきた」

〔恐ろしいカーリーが見せる手品〕

タクールは再び三味に入られた。もとに戻られるとまた、モニを相手にお話しになる――

「また境地が変わってきてね！――ブラサード（供物のお下がり）を食べることはおしまいになった！

――^{サチイア}実在と^{ミチイア}虚仮が一つになってしまった！――それから今、何を見たかわかるかい？ 神の姿だ！

至^{バガウツァテイ}聖大実母のお姿だよ――胎^{はら}のなかに子供がいて――それを産み落としてはまた、それを呑^のみこむ。

口のなかに入るとそれが無くなってしまふ！ わたしに教えているんだよ――すべては^{クウ}空だど！

大^マ実母はわたしにこう言っているようだった――『ほら！ほら！よくごらん、手品だよ！ほら！』

モニはタクールの言葉を思い出していた。――「手品師だけがそこにいるので、手品の見せ物はみんな錯覚なんだよ」

〔神通力はよくない――霊格の低い連中が求めるもの〕

聖ラーマクリシュナ「それはそうと、プールナを引っぱろうとしたのにうまくいかなかったのはなぜだろう？ あれで、少しばかり自信が減ったよ！」

モニ「そういうことは、一種の神通力でございましょう」

聖ラーマクリシュナ「そうだ、全くの神通力だ！」

モニ「ほら、アダル・センの家から南神村ドブキネシヨルに帰る途中、馬車のなかで瓶が割れたのを覚えていらつしやいますか？ 誰かが、『何か悪いことでも起こるのでしょいか？ 透視してみて下さいまし』と申しましたら、あなた様はこうお答えでした。『悪いことが起こるかどうか透視するなんて——そういうことはみな、神通力に属することだよ！ わたしはそんなものに関係ない』と」

聖ラーマクリシユナ「どこか体の悪い子供を、ハリ称名をしている人たちのそばの地面に寝かせておく——悪いところを治すためだがね——こういうものも神通力をたのんでのことだ。うんと霊格の低い連中が、病氣治しのためだけに神に祈るんだよ」

完全智——肉体と真我は別——自らの口からあふれる甘露

夕暮れになった。タクールは病床に坐つて大実母を想い、御名を称となえていらつしやる。大ぜいの信者たちがそばに静かに控えている。

間もなくサルカル医師が到着した。部屋には、ラトウ、シャシー、シャラト、若いナレン、バルトウ、ブパティ、ギリシユ等、大ぜいの信者たちが来ている。ギリシユといつしよに、スター劇場シヤターのラームタラン氏が来ていた。歌をうたう予定らしい。

医師「(タクールに)——昨夜の三時頃、あなたのことが心配で眠れませんでしたよ。雨が降っていたもんですから、この部屋の戸や窓がちゃんと閉めてあるかどうか、それがまた気になりましたね！」
タクールはやさしいまなざしを医師におくつて、満足そうに、「そうかい」とおつしやった。

聖ラーマクリシユナ「身体からだがある間は、その世話をしなけりやならん。

でもね、わたしには全く別なふうに見えるんだ。女と金に引かれる心が無くなったら、身体からだと真我アトマンとは全く別々なものだということがハッキリわかる。ココナッツの実の水気がすっかり乾ききってしまつたら、殻と種とは別々になってしまう。そうなるとココナッツに種のあることがはっきりわかるようになる。トポ、トポと音がするからね。刀かたなと鞘さやのようなものだ。刀と鞘とは別々だからね。

そういうワケだから、身体の病気を治して下さいと、あの御方かたにお願いする気がどうしても起こらないんだよ」

ギリシユ「学者バディットのシャシャダルが言っておりましたね。『あなた様は三昧のときに心を身体の方に集中なされば、必ず病気は治るでしょうに——』と。

この方は前三昧のとき、身体というものがアヨアヨした肉の塊以外の何ものでもないことをご覧になつたのです」

〔以前の話し——博物館でガイコツを見たこと——具合が悪いときの祈り〕

聖ラーマクリシユナ「だいぶ前のことだが、身体の具合が大そう悪くてね——カーリー堂マで大実母マの前に坐まっていた——お祈りしようと思つていたんだよ！　ところが、どうしてもうまく言葉が出てこない。やつとのこととで、『マー、わたしの病気のことでお願いしろと、フリダイが言うから……』とつぶやいただけで、それ以上のことが言えない。そのときふと、アジア協会の博物館のことを思い

出した。あそこには人間のガイコツを太い紐ひもでとどころ結ゆわえつけて飾かざつてあるんだよ。それで自然にこう口に出た——『マー、わたしはあんたの名をもっと称なえて讃たたえていたいから、この体をも少しシツカリ紐ひもで結ゆわえておいておくれ、あそこに飾かざつてあつたガイコツのように！』

神通力で病気を治すなんて、とんでもないコツた！

さいしよにフリダイがこう言ったんだ——あの当こ時はフリダイの言う通りにさせられていたんだね——『マーのところへ行つて、いろんな力を与えていただくようお願いしなさい』と。そうしようと思つてカーリー堂に行つたら、三十すぎの娼婦が腰巻こきをまくつてポロン、ポロンと糞くをたれていた。とたんに心の底から腹が立ったよ、神通力をつけてもらえなどと言つたフリダイにね』

〔ラームタラン氏の歌——タクトールの前三味〕

こんどはラームタラン氏の歌になつた——

私のかわいいこのヴィーナ

心をこめてやさしく弾はけば

絃いとは私の心をくんで

こよなく甘い声を出す

高たかすぎもせず、低ひすぎもせず

音律しらべの流れは美しく

百すじの川とあふれ出す

私の愛しいヴィーナの絃いとは

ゆるめすぎては音が出ず

きつく締めればプツンと切れる

医師「(ギリシユに)——これはみな、オリジナルなものですか？」

ギリシユ「いえ、これはエドウィン・アーノルド(訳註3)からの思索です」

次にラームタランは、戯曲『ブツダの生涯』のなかに出てくる歌をうたった——

われら、何処どこより何処どこへ行くか？

(訳註3) エドウィン・アーノルド (1831～1904) ——一八三二年にイギリスで生まれた詩人、随筆家、仏教・東洋思想研究家。世界で初めて『バガヴァッド・ギーター』の翻訳を行った。また、ブツダの生涯と思想を詩の形式で『アジアの光』にまとめ、このヒンディー語訳はマハートマー・ガンジーも愛読した。日本にも招かれ、日本中を旅して、「地上で、天国あるいは極楽にもっとも近づいている国だ」と絶賛した。前妻と死別していたエドウィンは、日本滞在中に、日本人女性、黒川玉と再婚している。晩年は仏教に関する翻訳を数多く手がけ、自らもスリランカで仏教徒となっている。

安息はいつ、何処にあるのか知らず

また戻りきて、泣き笑う輪廻の輪

いつまで廻る、この空しき営み！

覚めよ！ 汝ら肉の眼は開けども

浅き夢に眠り痴れたり…

覚めよ！ 無明の夢を碎けよ！

いつの日、この夢を碎くのか？

重く深く危きこの暗黒を

滅ぼし尽くして光明を放つ

覚者よ、君をおきて他に道なし

君が御足もとに、われ救いを求む

この歌をきいておられるうちに、タクルは前三昧状態になられた。
ラームタランは再び歌う。

(歌) ゴー、ゴー、ゴーと、外では嵐

〔太陽神を見たこと〕

この歌が終わると、タクールはこうおっしゃった。「これは、これは！ 甘くて柔らかい乳粥バヤスの後で、
苦にがい煎じ薬が出た！

——暗黒やみを滅やぼし光明ひかりを放つ御方——と歌っていたとき、わたしは輝く太陽をありありと見ていたんだよ。その御方が出ると、闇が消えてすべての人々がその御方の足もとに逃げこんだ」

ラームタランは再び歌った。

(二) 大実母はよ、弱はき者たちの救い主

罪を滅やぼし給う御方よ

その中にサットヴァ、ラジャス、タマスの三つの性グナを宿し

すべてを創り、育て、滅やし給う御方

無限相にして無相なる

すべてのすべてまことなる完まことき御方

一八八五年十一月六日に全訳あり

(二) 悟りも迷いもみんなどこかへ行つて

シャーママ母さんの礼拝も出来そうにない！

どうしても心が言うことをきかない

チツ、チツ、何ということだろう

この歌を聞くと、タクールはまた前三昧になられた。

お前の足もとにひと抱えもの

赤いバラを供^あげたは誰だろう

若いナレンはじめ信者たちの法悦——出家と在家の義務

歌は終わった。信者たちの多くは法悦に恍然うっとりとなつている。声も立てずに坐つたままだ。若いナレンは深い瞑想に入っている。木の切り株みたいになつて坐っている。

聖ラーマクリシユナ「若いナレンを指して、医師に——あれは、ほんとに純粹なんだ！ 世俗の知恵なんか、一カケラもついていない」

医師は若いナレンの方を見ている。まだ瞑想がつづいている。

マノモハン「(医師に笑いながら)——あなたの息子さんのことを話していらつしゃいましたよ。(タ

クルが』『息子が手に入ったら、親父の方には用はない』って、あつはつはつはつは」

医師「それ、ごらん！ だから私は言うんですよ——あなた方は子供の方にはばかり気をとられて、もつと大事なことを忘れていると！（即ち、宇宙神をそっちのけにして、神の化身に夢中になっていること）」

聖ラーマクリシュナ「ハハハ……。親父はいららないなんて——そんなこと言わないよ」

医師「わかっていますよ！ それくらいのことはおっしゃらなければならぬでしょうとも！」

聖ラーマクリシュナ「あなたの息子はとても素直だから——。いつかシャンブーが顔を真っ赤にして言っていたよ——『素直な気持ちで祈れば、あの御方は必ず聞きとどけて下さる』と。なぜわたしが少年たちをこんなに愛するのか、わかるかい？ あれたちは混ざりもののない牛乳だから、ほんの少し火を通しただけで神前に供えられる。

水の混ざった牛乳は、長いこと煮沸しなくちゃならぬ。たくさんの薪まきがあるよ。

少年たちは新しい鍋のようなものでね——きれいな器だ。安心して牛乳を入れておける。かれらに智識を教えると、またたく間に靈性が目覚める。世間ずれした人たちの場合は、そうはいかない。ヨーグルトなんかを作って汚れたまなまの鍋に牛乳をいれておくと、酸っぱくなる恐れがあるよ！

あなたの息子にはまだ俗知恵がない——女と金で汚れていない」

医師「父親の稼ぎで生活しているからですよ！ 自分で生活費を稼ぐようになって世間ずれしないかどうか、見たいものだ！」

「出家とゞ女を捨てること——出家とゞ金を捨てること」

聖ラーマクリシュナ「そりゃそうだ、その通りだ。だがね、あの御方は世間並みの常識からははるか遠くに離れていなさるが、それを捨てたら掌てのひらのなかにある。(サルカル医師とドウカリ医師に向かつて)——女と金を捨てるというのは、あなた方に対して言っているんじゃないやありませんよ。あなた方は心で捨てていけばよろしい。だからわたしは、ゴースワミー(ヴィシュヌ派の説教師)たちにこう言っているんだ——『あなた方はどうして、捨てる、捨てる』と説教するんだね? 捨てたら困るよ。シャー・マスタダラ(クリシュナ)のお祭が出来なくなるじゃないか!』とね。

サンニヤシ
出家の場合は、ほんとに捨てなけりゃいけない。女の絵さえ見てはいけない。出家にとつては女は毒だ。少なくとも十八ト(5m)以上は離れていなけりゃならん。もしどうしてもそれができない場合は、必ず一ハト(50cm)は離れているんだ。どんなに信心深い女性とでも、あまり話をしてはいけない。出家の住む場所は、女の顔を見ないですむところか、ごくたまにしか女が見えないところを選ぶんだよ。

金かねも、出家にとつては毒だ。金をそばにおいておくと、必ず心配や我執が出てきて、肉体の歓楽よろこびを求めたくなったり、怒りっぽくなったりする。ラジャス性が増してくる。それに、ラジャス性が出てくれば影が形に沿うようにタマス性があらわれてくるものだ。だから出家は金にさわってはいけない。女と金は神を忘れさせるからね」

〔医師への教訓——金の正しい使い方——在家の場合は妻と暮らす〕

「在家のあなたたちは、金で食べ物や家族の着るものを買ったり、住む場所を用意したり、家の神様を祀ったりする。それから、修行者や信者たちにサービスしたりすることだ。

使うべきところに使わずに、やたら貯めこもうとするのは間違いだ。蜂は大変な苦勞をして巣を作るが、人が来てアツという間に壊してしまう」

医師「全く、誰のために貯めているんでしょうねえ。グータラ息子のためなんですよ！」

聖ラーマクリシュナ「そう、グータラ息子！ それに、あばずれの女房！ 浮気してるかも知れないのに！ 浮気の相手に、亭主の時計や首飾りをやるかも知れないよ！

でもまあ、あなたの方の場合は、女と全くかわりを持たんというワケにはいかんだろう。奥さんといっしょに暮らしていても差し支えないよ。だが子供ができた後は、兄妹のようにして暮らすことだ。

女と金に執着しているから、知識誇り、金誇り、地位誇りが出てくるんだよ」

サルカル医師への教訓——我執高慢がよろしからず、明知の私、はよい

——それで人を導く

聖ラーマクリシュナ「我執高慢が無くならないと智慧は得られない。高い所には水は溜まらない。低い所には、四方八方から水がジャンジャン流れ込んでくる」

医師「しかし、凹地にはたしかに四方から水が流れこんできますが、良い水も悪い水もおかまいな

しに入つてきますよ。泥水も下水の水も——。だが、山の頂上にも凹地はあります。例えばナイニター
ルやマーナサローワル。(訳註)そこですと、空から降つてきた清浄な水だけが溜まります」

聖ラーマクリシユナ「空からの水だけか。——いいねえ！」

医師「それから、その高い所の水が、四方に流れていくという次第です」

聖ラーマクリシユナ「ハッハッハ。ある人がシッター・マントラ(くりかえし唱えていること)によって完全
解脱に達するという真言(マントラ)を手に入れた。彼は山のでっぺんに上がつて、大声で叫んだそうだ。『オーイ、
みんなア！ この真言を唱えろと神様をつかめるぞーッ』」

医師「はあ……」

聖ラーマクリシユナ「だがね、こうなんだよ。神を求めて命がけになると、一時、良い水も汚い水
もおかまいなしになる。あの御方のことを知りたくて、時には秀れた人のところに行つたり、時には
あまり感心しない人のところに行つたりする。だがね、あの御方が護つてくださるから、汚い水を飲
んでも腹をこわさない。そして、あの御方が真の智識を与えてくださった暁(あかつき)には、どれが良い水か、
どれが悪い水か、すっかりわかるようになる。

あなたの言うように、高い山の上にも凹地がある場合もあるよ。けれども、醜悪我(うしう)という山の上には決して凹地なぞありやしない。明知我(ちち)や信仰我(しんぎやう)の山なら、空からの清浄な水がたまる場
所がある。

高い所の水は四方に流れて行く、というのは本当だ。明知我(ちち)という山からは、智識の水が流れて

ゆく。

あの御方の許可がなければ、人を導くことは出来ないよ。シャンカラ^{アーチャーリヤ}大師は完全智に達したあと、
明知我^クを残しておきなすった——人びとを導くためにね。あの御方をつかみもせぬうちに、(宗教の)
講演だの講義だのするなんて！ あんなことをして、人のためになるとでも思ってるのかねえ？」

〔以前の話——サマーデヤイーの講演——ナンダンバガンのブラフマ協会を訪れたこと〕

「ナンダンバガンのブラフマ協会の集会に行ったことがある。礼拝式が終わったあとで、指導者が高い壇の上にあがって説教をするんだ。ナニ、ちゃんと家で書いたものを持って来ているのさ。読む前に、先ず一わたり、場内を見まわすんだよ。瞑想の時間のときも、この人はちよいちよい目をあけて皆を見まわしているんだ！

神を見たことのない人が宗教上の話をする、見当外れのことばかり言う。ひょっと正しいことを少し言ったかと思えば、もう次はおかしなことを言う。

サマーデヤイーが講演をしていた。こう言うんだ——『神は心と言葉を超えたもので——無味乾燥

(訳註4) ナイニタールとマーナサローワル——ナイニタールはインド北部ウッタラカンド州、標高二千mの高地にあるエメラルド色の水をたたえた湖。マーナサローワルは中国チベット自治区カイラス山のそばにあり、世界で最も高所にある湖で水の透明度が非常に高い。

なものである。よろしく諸君は、愛と信仰の甘露水を彼に注いで礼拝供養にはげむべきだ」と。見なさい！ 不滅の甘露そのもの、大歓喜そのものである御方をつかまえて、こんなことを言っている。こんな講演が何になる？ こんなことで人を導けるとでも思っているのかね？

ある人が言った——『私の叔父おじさんのところには牛小屋いっぱい馬がいる』と。牛小屋に馬だつて！（一同笑う）それで、馬がないということがよくわかるんだ」

医師「はっはっはっは、牛もないんでしょよ」（一同笑う）

深い法悦の恍惚状態こうごうに入っていた信者たちも、みな平常に戻っていた。信者たちを見まわしながら、医師は何かしら上機嫌である。

医師は「この人は誰？」「このかたは？」とさかんに校長に質問する。校長はそれに答えて——パルトウ、若いナレン、ブパティ、シャラト、シャシーたち、年若い信者たちを医師に紹介した。

シャシー(原註)のときに、「この青年は、学士の資格をとるところです」と説明しかけたが、医師はあまり関心がないようだった。

聖ラーマクリシュナ(医師に)——ほら、ほら！ 校長先生の言うことをよく聞きなさいよ」

医師はこんどは注意してシャシーのことを聞いた。

聖ラーマクリシュナ(医師に)「校長を指して——この人は学校に来ている少年たちを、ほんとうによく導いて下さるんだよ」

医師「私もそのことは、よく人から聞いております」

聖ラーマクリシュナ「不思議だねえ！ わたしは無学文盲なのに、高い教育を受けた人たちがこへやってくる。まったく不思議だ！ 神さまのお遊びだとしか言いようがないね！」

今日は満月コジャガリー・フルニマの日である。夜の九時。医師は六時ころから来てここに坐りこんでいる。そして一部始終を聞き眺めている。

「ギリシュ（医師に）——ときに先生、これは一体どういうことでしょうね？ ここに来るつもりはなかったのに、誰か目に見えぬものに引かれるようにしてやってくる——私もそんなものですから、こんなこと申し上げるのですがね！」

医師「さあ、そんな感じも別にしませんかねえ！ しかし、ハートのことはハートだけが知っている。（タクールに向かつて）——今さら、こんなことを言う必要もありませんかねえ」

（原典註） シャシー（後のスワミ・ラーマクリシュナーナンダ）が初めて聖ラーマクリシュナに会ったのは一八八四年のこと。